

第二言語習得論から見た小学校外国語活動

— 尾道市立日比崎小学校の取り組み —

小野 章

(2014年10月2日受理)

Foreign Languages Activities from the Viewpoint of Second Language Acquisition
— In the case of Hibizaki elementary school —

Akira Ono

Abstract: The processes involved in second language acquisition (SLA) can be depicted as follows (Lee and Vanpatten, 2003):

Input → Intake → Developing System → Output

Input is the language itself the learner encounters. The point is that most of the ‘raw input data’ (Lee and Vanpatten, 2003) need to be comprehensible. While the learner’s focus is basically on “meaning,” he/she also pays attention to “form,” linguistic features of language, and holds them in working memory. This process is called intake, and the linguistic data collected in the intake eventually construct a system which the learner refers to when he/she actually speaks or writes (i.e. in the output).

Hibizaki Municipal Elementary School in Onomichi City has been involved in foreign language activities since 2005. In 2013 I visited Hibizaki five times in total and, as an advisor, attended foreign language activities-related classes. This paper focuses on a class I attended on 1 October 2013. The class was for the 5th grade (31 pupils), and was on what Hibizaki teachers “can do.” The activities were conducted in such a way as to follow the SLA processes described above. The output performance the pupils voluntarily showed towards the end of the class was especially noteworthy.

Foreign language activities were formally introduced in Japanese elementary schools in April 2011. The discussion has already started whether we should treat English as a “subject,” not as activities. Although Hibizaki has taught English as “foreign language activities” so far, the class examined in this paper might help to bridge a gap between activities and a subject.

Key words: second language acquisition, foreign language activities, elementary school

キーワード：第二言語習得，小学校外国語活動

第1節 研究の背景と目的

平成23年4月から全面実施となった小学校外国語活動は今年度（平成26年度）で4年目に入った。本論で取り上げる尾道市立日比崎小学校は、尾道市や文部科学省の指定を受けながら平成17年度から外国語活動に先進的に取り組んできた¹。平成25年度も、尾道市の「特色ある教育研究を推進する事業」の「教科等研究

¹ 拙論「研究指定校における外国語活動への取り組み—尾道市立日比崎小学校の場合—」（『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第60号）および拙論「尾道市立日比崎小学校における外国語活動の実践報告」（『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第61号）を参照されたい。

指定校」として、外国語活動に関する研究を行い、その成果は平成25年11月29日（金）に同校で開催された研究会で公開された（研究主題：「小中9年間を見通した、確かな学力を育む授業の創造—授業におけるコミュニケーション活動の工夫を通して—」）。筆者は、外国語活動に関する助言者として平成25年6月18日、8月23日、10月1日、10月21日に同校を訪問し、前述の11月29日の研究会にも参加した。本論では、平成25年10月1日の校内研修会で筆者が実際に観察した5年生対象の外国語活動を、第二言語習得論の観点から分析したい。

第2節 第二言語習得の過程

本節では、Lee and VanPatten (2003) の論をまとめることで第二言語習得の過程を確認しておく（同書からの引用ページを括弧内に示す）。

第二言語習得の過程を図示すると次のようになる (p.133)。

Input → Intake → Developing System → Output

図1 第二言語習得の過程

習得過程の第一段階にあるインプットは、「学習者がさらされる言語そのもの」(“the language the learner is exposed to” (p.31)) であり、次のふたつの特性を備え持つべきであるとされている（引用中の斜字体は原文通り）。

The learner must be able to understand most of what the speaker (or writer) is saying if acquisition is to happen. (p.26)

[T]he language that the learner is listening to (or reading, if we are talking about written language) *must contain some message to which the learner is supposed to attend.* Thus, meaning-bearing input has some communicative intent; the purpose of the speaker is to communicate a message to a listener. (p.27)

まずインプットは、学習者にとって理解可能なものである必要がある。しかし、それだけでは不十分である。理解可能であるに加えて、インプットは学習者にとって「意味ある」(“meaning-bearing”) メッセージを含んでいる必要がある。

インプットに続いてインテイクが起こる。イン

プットはいわば「生のままのデータ」(“raw data” (p.133)) であり、そのデータから学習者はまずは「意味」(meaning) を取り出そうとする。その過程で学習者は「言語形式」(form) にも関心を払い、それを作動記憶へと取り込んでいく。これがインテイクである。

Intake refers to the linguistic data in the input that learners attend to and hold in working memory during online (real-time) comprehension. As such, research on input processing attempts to explain how learners get form from input while their primary attention is on meaning. (pp. 137-38)

インプットされるものが全部インテイクされるわけではない。実際には、インプットで触れた言語形式のうち、一部のみがインテイクとして学習者の記憶に留まる。

インテイクした言語形式を基に学習者は、最終的には「非明示的言語体系」(“implicit linguistic system”) を構築していく。

Like first language learners, second language learners ultimately construct an *implicit linguistic system* consisting of a variety of components that interact in language use (e.g., a lexical system of words and grammatical inflections such as noun markers and verb markers, a phonological system that governs the sounds, a syntactic system that controls the structure of sentences.) (p.15)

構築されつつある非明示的言語体系を表したものが図1の3番目の「発達中の体系」(“developing system”) である。

図1の最後にあるアウトプットは、学習者が、自らの中に構築した（あるいは、構築しつつある）非明示的言語体系を参照することで初めて可能となる。

[L]earners build an implicit mental representation of the language they are learning. They access this system to create utterances, that is, to speak. (p.132)

以上、Lee and VanPatten (2003) に依拠しながら、第二言語習得の過程を概観した。まとめると次のようになる。まず、インプットにさらされた学習者は、そ

こから意味を汲み取ろうとする。その過程で学習者は、一部の言語形式に関心を払い、作動記憶へと取り込んでいく（インテイク）。インテイクによって取り込まれた言語形式が寄せ集まり、最終的には非明示的言語体系が学習者内に構築される。この体系を基に学習者はアウトプットを行う。

第3節 日比崎小学校における外国語活動の実践概要

本論の目的は、前節で確認した第二言語習得の過程に照らし合わせながら、日比崎小学校の外国語活動を分析することである。分析対象は、筆者が実際に観察した5年生対象の外国語活動である。同活動の概要を、担任（HRT）とJTEが中心になって作成した指導案を基に本節では紹介する。なお、主に「読み易さ」の観点から、同指導案の一部は筆者によって変更されている。

第5学年外国語活動指導案

- 1 日 時 平成25年10月1日（火） 第3校時（45分間）
- 2 学 年 第5学年1組 31名
- 3 場 所 5年1組教室
- 4 本単元について
 - (1) 本単元名 「できることを交流しよう」
 - (2) 本単元の概要

(4) 本単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ		言語や文化に関する気付き
自分のできることを紹介したり、相手のできることを知ろうとしたりしている。 下の「本単元の活動計画」の「規準ア」	相手のできることやできないことを、自分と比べながらきいている。 下の「本単元の活動計画」の「規準イ」	自分のできることを紹介したり、相手のできるかどうかを尋ねたりしている。 下の「本単元の活動計画」の「規準ウ」	できること、できないことは人によって違いがあることに気付く。 下の「本単元の活動計画」の「規準エ」

(5) 本単元の活動計画（全5時間 本時2/5）*本論の紙幅の都合上、「2 本時」以外は割愛

時	学習内容等	評価規準（◎が主たるもの） 規準ア～エは(4)「本単元の評価規準」参照 評価方法 行：行動観察 ワ：ワークシート 振：振り返りシート			
		関心 意欲 態度	慣れ親しみ		気付き
		規準ア	規準イ	規準ウ	規準エ
1	（省略）				
2 本時	概要：クイズ形式で、何ができるのかをきき取る。 タイトル（黒板に掲示）： できることクイズ～私は誰でしょう？～		◎ 行 振		○ 行 振

児童によってできることもあれば、できないこともある。そこで本単元では、“can”を使って自分を表現するとともに、友達の話聞き力を児童に付けさせた。最終的には、新しいALTに、「できる」「できない」という表現を使って、児童自身のことを知ってもらおうことをねらいとしている。

上述のねらいを達成するために必要となる主な言語材料は“I can ____.” “Can you ____?” “Yes, I can.” “No, I can't.”である。また、気持ちのよいやりとりを可能にする表現として“Good.” “Really.”等も使用する。

本単元は、*Hi, friends!* 2のLesson 4を活用する。単元前半で“Can you ____?” “Yes, I can. / No, I can't.”の表現を繰り返しかせたり声に出させたりすることで、同表現に児童を慣れ親しませたい。

(3) 本単元の日標

- ・お互いのことを知るために、進んで自分のできることを伝えたり、友だちのできることをきいたりしようとする。（関心・意欲・態度）
- ・知っている言葉や表現から、相手のできることやできないことを自分と比べながらきく。（慣れ親しみ）
- ・知っている言葉や表現を使って、自分ができることを紹介する。（慣れ親しみ）
- ・できること、できないことは人によって違いがあることに気付く。（気付き）

	使用する表現： A : I can _____. Can you _____? B : Yes, I can. / No, I can't. A : Good. / Really. 留意点： 校内の先生方のできることを、クイズ形式にしてきき取らせることを通して、第1時に引き続き“I can _____”の表現に慣れ親しませる。				
3		(省略)			
4		(省略)			
5		(省略)			

5 本時について

(1) 本時の目標 (◎が主たるもの)

- ◎ 知っている言葉や表現から、相手のできることやできないことを自分と比べながらきく。(慣れ親しみ)
- できること、できないことは人によって違いがあ

ることに気付く。(気付き)

(2) 本時の準備物

先生方の写真、できることを表わす絵、ワークシート (下の(4)を参照)、ワークシートの拡大図、振り返りシート (下の(5)を参照)

(3) 本時の展開

ACTIVITIES 全体への支援 (○)・努力を要する児童への手立て (●)・評価 (※)		
Children	HRT	JTE
1 あいさつ (1分間) Hello, everyone. I'm ____ thank you. And you?	Hello, everyone. How are you? I'm ____ thank you.	Hello, everyone. How are you? I'm ____ thank you.
2 主活動 (①～③計8分間) (④32分間)	A : I can _____. Can you _____? B : Yes, I can. / No, I can't. A : Good. / Really.	
① 単元のゴールを確認する。		
② 前時で触れた英語表現を振り返りながら、JTEと会話のやりとりをする。	○ “Can you _____?” “Yes, I can.” “No, I can't.” の表現に慣れるよう、児童に発話を繰り返させる。	
③ 本時のめあてを確認する。	先生方ができることをきき、先生方のことをもっと知ろう	
④ クイズ活動をする。	【できることクイズ～私は誰でしょう?～】 JTEが、“I can _____.” “Can you _____?” を使いながら、校内の先生方の特技をクイズ形式で紹介する。まず、児童はその特技が何であるのかをきく。次に、その特技を持っている先生が誰であるかを予想してワークシートに印をつける。最後に、答え合わせをした後、児童はJTEの発話を繰り返す。	
	○ 児童とともに反応を返しながらきいたり、JTEの発話を繰り返したりする。 ● 知っている言葉を意識づける。	○ できることを強調したり、ジェスチャーを工夫したりして発話する。

第二言語習得論から見た小学校外国語活動
— 尾道市立日比崎小学校の取り組み —

	<p>※ 相手のできることやできないことを、自分と比べながらきいている。(慣れ親しみ・規準イ) (行動観察・振り返りシート)</p> <p>※ できること、できないことは人によって違いがあることに気付く。(気付き・規準エ) (行動観察・振り返りシート)</p>	<p>※ 相手のできることやできないことを、自分と比べながらきいている。(慣れ親しみ・規準イ) (行動観察)</p> <p>※ できること、できないことは人によって違いがあることに気付く。(気付き・規準エ) (行動観察)</p>
3 振り返り (2分間)	<p>○ 本時のねらいが達成できたか自己評価させ、達成感をもたせる。</p> <p>○ 本時のねらいが達成できていた児童を評価し、みんなに紹介する。</p>	<p>○ 本時のねらいが達成できていた児童を評価し、みんなに紹介する。</p>
4 あいさつ		

(4) 本時配布のワークシート

(月 日) Name ()	
先生方ができることをきき、先生方のことをもっと知ろう	
	できること
No.1	
No.2	
No.3	
No.4	
No.5	
No.6	
No.7	
No.8	

- ・岡本校長先生
- ・早間教頭先生
- ・吉山先生
- ・衛藤先生
- ・桂田先生
- ・松井先生
- ・行広先生
- ・大名先生
- ・越智先生
- ・森原先生
- ・田川先生

(5) 本時配布の振り返りシート

1 先生方ができることを予想しながらきいた。	<p>A (した)</p> <p>B (どちらかといえばした)</p> <p>C (どちらかといえばしなかった)</p> <p>D (しなかった)</p>

第4節 日比崎小学校における外国語活動と第二言語習得の過程

本節では、第2節で触れた第二言語習得の過程に照らし合わせながら、日比崎小学校における外国語活動を分析したい。なお、分析対象である平成25年10月1日の5年1組の外国語活動では、許可を得てビデオ撮影・写真撮影を行った。ビデオに収録された音声と、第3節で紹介した「第5学年外国語活動指導案」のうち「5 本時について」の「(3) 本時の展開」を中心に分析を行う。

第4節第1項 インプット

第2節で触れたように、第二言語習得過程の第一段階であるインプットには、ふたつの特性が備わっているべきだとされている。すなわち、(1) 話し手が話すことのほとんどを聞き手は理解出来なければならないという特性と、(2) 聞き手が聞く言語はその聞き手にとって意味のある内容を含んでいなければならないという特性である。

指導案「(3) 本時の展開」の「2 主活動 ② 前時で触れた英語表現を振り返りながら、JTEと会話のやりとりをする」では、JTEと児童との間に例えば次の

ようなやり取りが見られた。なお、このやり取りは、ジェスチャーや絵等を使わずに音声のみで行われた。

JTE: I can play soccer. Can you play soccer?

児童: Yes, I can. (もしくは No, I can't.)

JTE: Good. (この時初めて、できることを表わす絵 (この場合は、サッカーをしている絵) を黒板に貼る。)

JTE からの問いかけ (“Can you play soccer?”) に対し児童は、肯定的な答えの場合は手を挙げながら、否定的な答えの場合は手を挙げずに、それぞれ “Yes, I can.” もしくは “No, I can't.” と答えていた。他の競技等の場合 (例: baseball, basketball, badminton, table tennis, kendama) にもちゃんと反応していたことから、児童は JTE の発する英語を理解していたと判断出来る。また、使われている表現も、児童が家庭や学校などで体験していることと関連があり、内容を伴ったものである。主活動のはじめに行われたこの「前時で触れた英語表現[の]振り返り」の活動は、インプットのふたつの特性をともに備えていると考えられる。

第4節第2項 インプットからインテイク、アウトプットへ

第1項で触れた「2 主活動 ② 前時で触れた英語表現を振り返りながら、JTE と会話のやりとりをする」に続いて、本時のめあて(「先生方ができることをきき、先生方のことをもっと知ろう」)が確認された。そのめあて確認の後に行われた「④ クイズ活動をする」を本項では分析したい。

指導案にあるように、「できることクイズ～私は誰でしょう?～」は、JTE が “I can ___.” “Can you ___?”

などの表現を使いながら、校内の先生方のできることをクイズ形式で児童に紹介していく活動である。同活動は以下の手順で進められた。

- (1) JTE は、個人名を明かさないうまま、例えば “No.1. I can play the piano. I can swim. I like gardening.” と話す。
- (2) 聞き取った内容を児童は、前節の「本時配布のワークシート」の「できること」欄にメモしていく。
- (3) 5人分 (No.1～No.5) 進んだところで、1分間程活動が止められる。その間に児童は、「できること」欄に書き込んだメモから、その内容が誰に該当するかを予想し、「できること」欄と先生の名前を線で結んでいく。
- (4) (2) において「できること」欄に書き込んだメモの真偽をクラス全体で確認したのち、(3) の予想に対する正解を JTE が明らかにする。
- (5) 残り3人分 (No.6～No.8) について、(1)～(4) の作業を繰り返す。

できることが何であるかの聞き取りを、時として児童は困難に感じているようであった。そのような場合、JTE は英語表現を繰り返すとともに、できることを表わす仕草 (例: “tea ceremony” ならば、茶碗を回す仕草) をすることで、聞き取りの補助を適宜行った。次の表1は、実際のやり取りを筆者が文字に書き起こしたものである。紙幅の都合上、教員 No.1～No.8 について出された全8名分のクイズ中、4名分 (教員 No.1, No.2, No.3, No.8) を示す。

表1 主活動「クイズ活動」での実際のやり取り

活動前の指示	担任: (ワークシートの)「できること」って書いてあるところに、今から聞いたことをメモして下さい。わからない言葉はジェスチャーなどをヒントにして下さい。 JTE: Please listen to me, and take notes.
やり取り① 教員 No.1のできることについて	JTE: No.1. I can play soccer. I can play kendama. I can cook. I can cook Italian food. I can cook pasta. 担任: ○○君、何個書けた? 児童 A: 3つ。 担任: 3つ。OK.
やり取り② 教員 No.2のできることについて	JTE: Let's move on to No.2. OK, No.2. I can play the piano. I can make special green tea, because I like the tea ceremony. 児童 B: 2個あった。 JTE: Two things. Yah, that's right! Good listening. Great. 児童 C: Once more please. JTE: Once more. OK. No.2. I can play the piano. I can make special green tea, because I like tea ceremony.

第二言語習得論から見た小学校外国語活動
— 尾道市立日比崎小学校の取り組み —

	<p>児童 D：お茶，抹茶。 児童 E：コーヒー。 担任：コーヒー？なんかこんな動作が無かったっけ（茶道で茶碗を回す仕草をしながら）？ 児童 E：お茶かあ。</p>
やり取り③ 教員 No.3のできること について	<p>JTE：Let's move on to No.3. OK, No.3. I can swim. I can do Aikido. 担任：大丈夫？聞けた？もう一回？ 児童 F：もう一回。 担任：そんな時はなんて言うの？ 児童 F：Once more, please. JTE：No.3 I can swim. I can do Aikido.</p>
活動半ばでの指示	<p>担任：(No.5まで進んだところで) じゃあ，ワークシートの「できること」欄に書き込んだメモを見て，No.1～5がどの先生かを予想しながら線で結んでください。1分間あげます。予想が外れてもいいからね。逆に，予想が外れた方が，意外で良いかもしれないね。</p>
やり取り④ 教員 No.1のできること の答え合わせ	<p>JTE：OK. Let's check the answers. No.1. What can I do? Three things. 児童 G：サッカーだと思います。 児童 H：けん玉だと思います。 児童 I：料理が出来ると思います。 児童 J：付け足します。イタリア料理で，パスタだと思います。 担任：よく聞いてました！ JTE：Good listening! JTE：Who is No. 1? He, or she? 児童多数：He! He! (JTEは7人の男性教員の名前を一人ずつ挙げていく。No.1の人物に該当すると思われる教員の名前が出たところで，児童は挙手をする。7人全員の名前を挙げた後，JTEは正解を発表する。)</p>
やり取り⑤ 教員 No.2のできること の答え合わせ	<p>JTE：No.2. What can I do? 児童 K：ピアノが出来ると思います。 JTE：Yes, I can play the piano. I can play the piano, and one more thing. I can... 児童 L：茶道が出来るんだと思います。 担任：よく聞いていたね！ 児童 M：グリーンティー。 担任：そう！ JTE：So, who is No.2? He, or she? 児童多数：She. (JTEは4人の女性教員の名前を一人ずつ挙げていく。No.2の人物に該当すると思われる教員の名前が出たところで，児童は挙手をする。4人全員の名前を挙げた後，JTEは正解を発表する。)</p>
やり取り⑥ 教員 No.3のできること の答え合わせ	<p>JTE：So, No.3. What can I do? I can... 児童 N：水泳が出来ると思います。 JTE：Yes! In English, I can... 児童多数：Swim! JTE：Yes, I can swim. Good. I can swim and I can... 児童 O：合気道が出来るんだと思います。 JTE：Yes! I can do Aikido. I can do Aikido. (doを強調しながら) 担任：もう1回。I can do... 児童多数：I can do Aikido. 担任：何か違いが無かった？ 児童多数：Do. Do. JTE：Good! 児童 P：今までは play とか，何も無かったりしていたけど，合気道の場合は I can の次に do って言っていたと思います。 JTE：Excellent! 担任：気付いた？うん。OK. また do が出てくるかもしれないからね。 JTE：Who is No.3? He, or she? 児童多数：He! He! (JTEは残り6人の男性教員の名前を一人ずつ挙げていく。No.3の人物に該当すると思われる教員の名前が出たところで，児童は挙手をする。6人全員の名前を挙げた後，JTEは正解を発表する。この正解は意外だったらしく，多くの児童が驚いていた。)</p>

やり取り⑦ 教員 No.8のできること の答え合わせ (の一部)	JTE: I can do Kendo. 担任: 何か前あったよね。do … 児童多数: 合気道! JTE: Yes! I can do Aikido. I can do Sumo. I can do Judo. 児童 Q: 空手も? JTE: Yah, I can do Karate!
--	---

やり取り①～③では、各教員のできることの中身ではなく、それがいくつあるかを主に児童に答えさせていた。できることの中身の聞き取りについては、主にやり取り④～⑦で確認された。これらのやり取りが、第二言語習得過程のインプット、インテイク、アウトプットとどのように関わるかを分析したい。

インプット

教員 No.1を扱ったやり取り①④で注目すべきは、できること概念が上位のものから下位のものへと移っても、児童は混乱することなく聞き取っていたということである。ここではサッカー・けん玉・料理ができることとして挙げられているが、それらをいったん同列に捉えた上で児童 J は、料理についてはその下位カテゴリーであるイタリア料理や、さらなる下位カテゴリーであるパスタまで聞き取っていた。

教員 No.2を扱ったやり取り②で JTE が使った英語表現中、重要なものは“I can play the piano”と“I can make special green tea”と“I like the tea ceremony”の「3つ」であろう。にもかかわらず、児童 B はできることが「2個あった」と正しく指摘している。恐らく、“green tea”と“tea ceremony”が同じカテゴリーに属すると考え、併せてひとつのできることと判断したのであろう。ただし、他の児童の中には、この“green tea”（もしくは“tea ceremony”）を少し理解し辛く感じる者もいたようである。うまく聞き取れなかったのか、児童 C は“Once more please.”と言って、JTE に発言を繰り返すように求めている。また、児童 E は「コーヒー」だと勘違いしている。もっとも、担任の茶碗を回す仕草もあって、最終的には正解をクラス全体で共有するに至った。

以上、やり取り①④、②⑤から、JTE の英語を児童は一応理解していることが分かる。「理解可能な」ものであるべきだというインプットの条件を満たしていると言えよう。また、普段接している教員たちのできることに児童は関心を抱いていたようであり、意外な発見があった際には大いに盛り上がっていた。イン

プットは学習者にとって意味あるメッセージを含むべきだという条件も満たしていると言える。

インテイク

教員 No.3を扱ったやり取り⑥で注目すべきは、「合気道」には“play”ではなく“do”を用いることに児童が気付いた点である。確かに、JTE は“do”を強めに発音したし、担任も「何か違いが無かった？」と水を向けはした。それでも、多数の児童が「合気道」には“do”を用いることにすぐに気付いた点、児童 P に至っては「今までは play とか、何も無かったりしていたけど、合気道の場合は I can の次に do って言っていたと思います」と明確に説明した点は特筆に値しよう。

後の、教員 No.8を扱ったやり取り⑦で“do Kendo”という表現が出てきた際にも、やり取り⑥で“do Aikido”という表現を用いたことを思い出し、さらには「空手」にも“do”を用いるのではないかと正しく予想までしている。

表1には含めなかったが、授業最後の「振り返り」でも、「剣道や合気道には“do”を付けることがわかりました。他のスポーツにもつけるのかなあと思いました」という意見を発表する児童がいた。

これらのことから、JTE が使う英語の「意味」のみならず、その「形式」にも児童が注意を払っていること、つまりインテイクが起きていることがわかる。

アウトプット

予定されていた通り、主活動「クイズ活動」では8名の教員のできることが紹介された。その後授業は「振り返り」へと展開するはずであったが、指導案にも含まれておらず、ゆえに担任や JTE にも予想外の出来事がここで起こった。ある児童が、ビデオ撮影をしていた I 先生に、「I 先生は？」と尋ねたのである（I 先生は先の8名には含まれていなかった）。その時のやり取りを表2に書き起こす。

表2 児童とI先生との自主的なやり取り

児童Q：I先生は？
JTE：You can ask questions.
担任：うん、聞いてみたらいい。
JTE：(サッカーをしている絵を示しながら) Can you...?
児童多数：Can you play soccer?
I先生：Um... No, I can't.
児童R：(絵を示される前に) Can you play baseball?
I先生：Baseball? Yes, I can!
児童S：(絵を示される前に) Can you swim?
I先生：Of course, I can!
児童T：(絵を示される前に) Can you cook?
I先生：Yes, I can.
児童U：(絵を示される前に) Can you do Aikido?
I先生：No, I can't.
(以下、省略)

第3節で見たように、本時の目標は、(1)「知っている言葉や表現から、相手のできることやできないことを自分と比べながらきく」と(2)「できること、できないことは人によって違いがあることに気付く」の2点であり、いずれもインプットもしくはインテイクに関わるものである。アウトプットは、本時(第2時)ではなく、第3~5時の目標として掲げられていることが単元計画からわかる。しかし、表2にあるように、本時で触れた表現を使って児童はI先生のできることを自ら聞き出そうとした、つまりアウトプットを自主的に実践したと言えよう。想定された目標以上のことを児童が実践したということは評価に値する。

第5節 まとめ

小学校外国語活動においてもっとも顕著な活動はアウトプットに関わるものであろう。児童が実際に話している様子は確かに「目立つ」。一方、インプット、インテイクに関わる活動は比較的地味な印象を与えるかもしれない。しかし、第2節で見たように、第二言語習得の過程では、インプットからインテイクを経てアウトプットに至るとされている。アウトプットにはインプット、インテイクが不可欠なのである。

小学校における英語の在り方をめぐっては、外国語活動のままにするのか、それとも教科化するべきかが議論されている。本論は小学校外国語活動を第二言語習得の観点から分析するものであったが、「第二言語習得」という表現そのものが「教科」としての英語を想起させるものかもしれない。しかし、外国語「活動」にあっても、第二言語習得過程におけるインプット→インテイク→アウトプットという流れは踏襲すべきものとする。『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』にも次のように書かれている。

音声面の指導については、さまざまな工夫をしながら聞くことの時間を確保し(中略)聞き慣れた表現から話すようにさせるなど、児童にとって過度の負担にならないように指導することが大切である。

「聞き慣れた表現から話すようにさせる」とは、インプットをしっかりと行った上でアウトプットを行うべきだということであろう。換言すれば、アウトプットを急がせ過ぎないことが求められる。前述のように、アウトプットは「目立つ」活動ゆえに、同活動を重視し過ぎてしまうことが危惧される。しかし、そのようなアウトプット「偏重」の授業は、教師が発する英語表現を児童が単に「オウム返し」するようなものになってはいないだろうか。そうではなく、児童にしっかりと意味処理をさせ(インプット)、意味処理をさせる中でしかるべき言語形式には注意を向けさせ(インテイク)、その上で話させる(アウトプット)という一連の流れが望ましいと考えられる。まさにそのようなインプットからアウトプットへのスムーズな移行が、本論が対象とした日比崎小学校の授業では実践されていたことをここに報告する。

【参考文献】

- Lee, J. F. & VanPatten, B. (2003). *Making Communicative Language Teaching Happen*. New York: McGraw-Hill.
- 小野 章 (2011) 「研究指定校における外国語活動への取り組み—尾道市立日比崎小学校の場合—」 『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』 第60, 145-152.
- 小野 章 (2012) 「尾道市立日比崎小学校における外

国語活動の実践報告」『広島大学大学院教育学研究
科紀要 第二部(文化教育開発関連領域)』 第61号,
189-97.
尾道市立日比崎小学校 (2013) 「平成25年度日比崎小・

中学校教育研究会研究要項」
文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国
語活動編』 東洋館出版社.